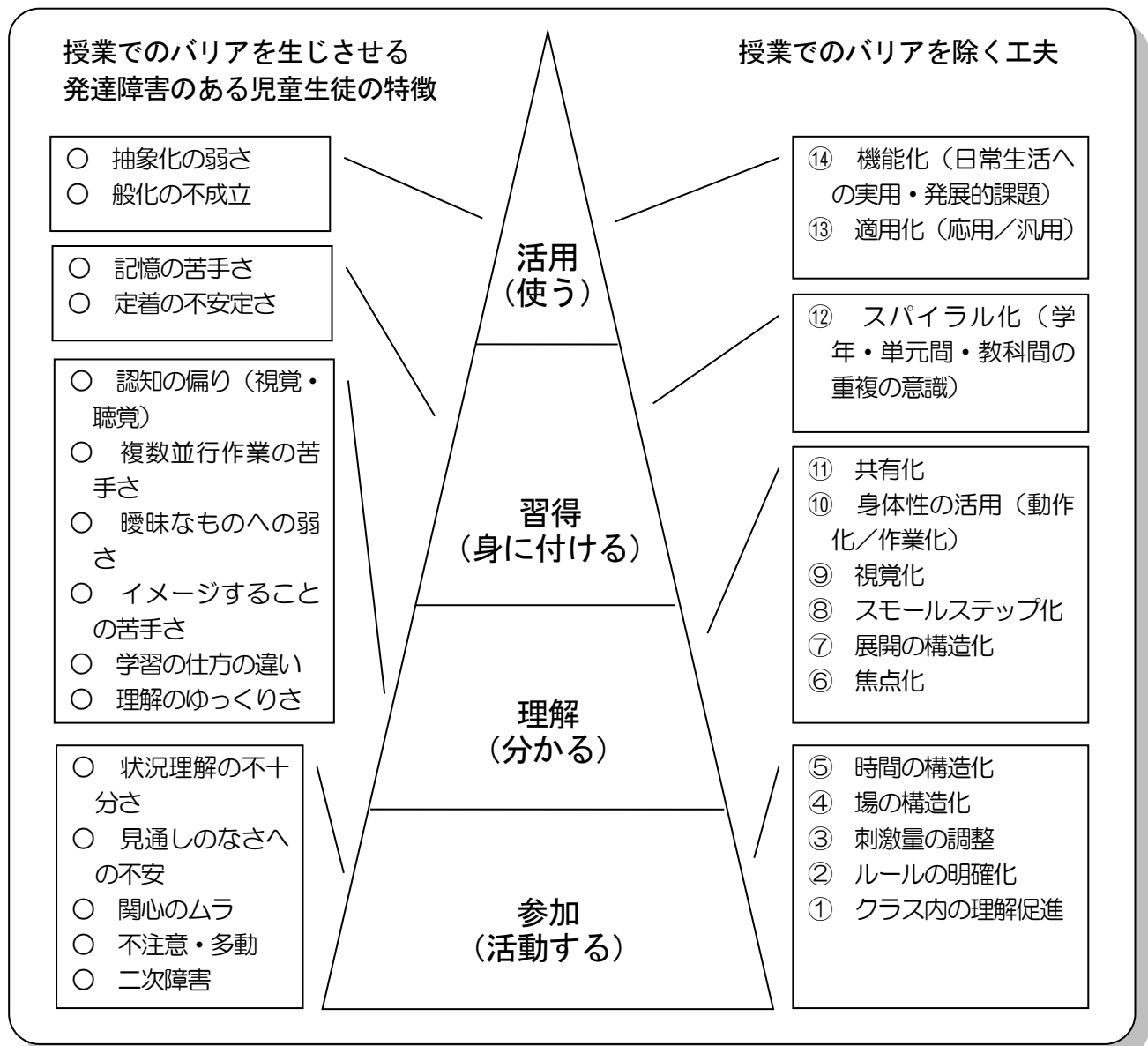


授業のユニバーサルデザイン

「ユニバーサルデザイン」は、年齢、性別、障害の有無等を問わず、あらゆる人々が利用しやすいようにあらかじめ設計することを意味します。この考え方を授業に当てはめたものが「授業のユニバーサルデザイン化モデル」です。通常の学級には、発達障害のある児童生徒を含め、授業に対して様々な困難さ（バリア）を感じている児童生徒が在籍しています。授業を進める上で、発達障害のある児童生徒には「必要」であり、どの児童生徒にも「あると便利」な工夫を増やしていくことは大切です。

図は、中央に授業の四つの階層を示し、左側に各階層の「授業でのバリアを生じさせる発達障害のある児童生徒の特徴」を、右側に「授業でのバリアを除く工夫」を示しています。

1 授業のユニバーサルデザイン化モデル



参考：授業のユニバーサルデザイン研究会・桂聖・石塚謙二・廣瀬由美子（2014）：『授業のユニバーサルデザイン Vol.7 授業のユニバーサルデザインとインクルーシブ教育 道徳授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社

2 授業でのバリアを除く工夫

参加（活動する）

- ① クラス内の理解促進
 - 失敗を笑わないような学級の雰囲気をつくる。
 - 得意・不得意を含めたお互いの理解を機会がある度に促進する。
- ② ルールの明確化
 - 意見を言うとき、聞くととき、指導者の指示に注目するときなどの基本的なルール、授業の進め方などを決めておく。
 - 児童生徒が安心して参加できるように、ルールを決めておく。
- ③ 刺激量の調整
 - 教室内の掲示物や教室外の音などの無意識に飛び込んでくる妨害刺激を調整する。
- ④ 場の構造化
 - 教室を整理整頓し、決められた物が決められた場所にある状態を維持することで、学習環境の機能を高める。
- ⑤ 時間の構造化
 - 時間が見えるようにスケジュールなどに示す。
 - 見通しをもたせ、行動をコントロールしやすくさせる。

理解（分かる）

- ⑥ 焦点化
 - 授業を「シンプル」にする。
- ⑦ 展開の構造化
 - 授業の展開を論理的な構造に工夫する。
- ⑧ スモールステップ化
 - 指導目標の達成に向けて、そのステップを細かくする。
- ⑨ 視覚化
 - 見えないものを「見える化」し、児童生徒のイメージを湧きやすくする。
- ⑩ 身体性の活用（動作化／作業化）
 - 身体を使わせることで理解を深めさせる。
 - 認識だけでは拾えないような新しい気づきを生じさせる。
- ⑪ 共有化
 - 互いの考えを伝え合ったり、確認させたりする。
 - 「できる」児童生徒には、自分の意見を深めさせる。
 - 理解に不安がある児童生徒には、自分の意見に足りない部分を補わせる。

習得（身に付ける）

- ⑫ スパイラル化（学年・単元間・教科間の重複の意識）
 - 既習学習の復習を常に授業に入れ、再理解のチャンスや習得の深まりを確保する。

活用（使う）

- ⑬ 適用化（応用／汎用）
 - 習得したことを、状況が変わってもできるようにさせたり、応用が利くように導いたりする。
- ⑭ 機能化（日常生活での応用・発展的課題）
 - 授業で学んだことを実用的に使用できるようにさせる。